

図書だより

〈第31号〉

平成6年10月31日

呉工業高等専門学校

図書委員会



▲レーザーディスクの視聴風景

目 次

〔巻頭文〕図書館いろいろ	図書館長 鍋本 暁秀	2
〔読書感想文〕		
歴史 「長屋王木簡の発見」(寺崎保広著)	M 1 濱西はるみ	3
「坂本龍馬」(八尋舜右著)	E 1 野田 俊彦	3
文学 「高安犬物語」(戸川幸夫著)	M 2 竹本 友和	4
「青春デンデケデケデケ」(芦原すなお著)	E 2 山田 隆司	5
政経 「ガン病棟の九十九日」(児玉隆也著)	C 3 藤原 理恵	5
「結婚と家族」(福島瑞穂著)	A 3 沖本 千枝	6
〔随想・読書雑感〕		
「自分にとっての読書」	M 4 野村 和未	7
「蹴球と私」	M 5 岡 有希	7
「勝海舟と坂本龍馬」	E 4 渡辺 慎一	8
「今日に生きる17世紀の哲学」	E 5 物部 恵介	9
「すてきなあなたに」(大橋鎮子著)	C 4 畝本 紀子	9
「マイライフ」を観て	C 5 関 泰心	10
「こんな家に住みたいナ」(延藤安弘著)	A 4 風早 裕子	10
〔新任教職員随想〕		
「呉高专に着任して思うこと」	機械工学科 鬼塚 千明	12
「随 想」	土木工学科 市坪 誠	12
〔海外だより〕		
「カルチャーショック」	電気工学科 野村 利英	13
〔私の推薦する本〕		
「映画を読んでみませんか」	一般科目 周藤 剛士	15
「コンクリートの話 I・II」 藤原 忠〔他〕著 技報堂出版	土木工学科 阿部 康俱	16
「世界デザイン史」 阿部公正監修 美術出版社	建築学科 篠部 裕	16
〔新着図書10選〕		17
〔お知らせ〕 LD利用ベストテンと学年別利用者数		18
〔編集後記〕	図書館長補 篠部 裕	18

巻頭文

図書館いろいろ

図書館長 鍋本 暁 秀

わが国で一番大きい図書館は国会図書館である。

国会議事堂のそばに、地上6階・地下2階の本館、地上4階・地下8階の新館、合わせて建物の延べ面積は約14万6千平方メートルもある。

図書は約五百九十万冊、地図約三十五万枚、レコード約三十六万枚、マイクロフィルム約二十万リール、新聞雑誌など約十三万種である。

一日の利用者は約二千二百人、冊数は約六千八百点となっている。

この図書館は、国会の立法活動や国政審議に資することを目的としているが、一般の国民も利用できるようになっている。

わが国で刊行されたすべての刊行物が納められており、特に科学技術資料に関しては、内外の科学図書、雑誌、報告、論文などを網羅しているということで、最も頼りになる図書館である。

しかし、国会図書館は余りにも大きすぎて、一回や二回の入館では、マゴマゴしてやたら時間を空費するだけともいわれている。

余談だが、入り口が、議員専用のものと一般利用者のものとに分かれていることや、閲覧資格が満二十歳以上となっていることなど、いかにも国会図書館らしい。

話がかわって、本校の図書館の場合、延面積約七百平方メートル、図書約七万冊、雑誌約七百種、CD-ROM十二枚、レーザーディスク六十八枚、コンパクトディスク二十九枚など、ささやかな規模である。

本校では、教官の教育研究用と学生の学習用を目的とし、一般の市民も利用できるようになっている。

ところで、首都の中心にある国会図書館と地方都市の外れにある本校の図書館とは何も関係がないように見えるが、実は隣同士のようなつながりがある。

試みに、本校の図書館のカウンターに申し出ると、必要な資料の所在をその場で調べてもらえるが、本校図書館に無い場合、全国の図書館を調べてもらえる。

希望すれば、探し当てた図書館から本を借りること

もできるし、また論文のコピーを取り寄せることもできる。国会図書館も、そんな図書館の一つである。

コンピュータと情報ネットワークのお陰で、全国の国公立図書館が、呼べば応える隣同士の関係なのである。

さて、図書館というところは、ぶらっと出かけて新聞雑誌をひろい読みしたり、話題の新刊書をばらばらと開いてみたりした後、ゆっくり読むための本何冊かを借りて帰ってくるといった、ごく気楽なつき合い方がよいとされている。

ふだんから気軽に利用していると、だいたいの勝手が分るから、いざ調べものをしようというときに迷うことがない。

ところで、少し専門的な問題について調べるときなど、本校の図書館では物足りないことがある。そんなとき県立図書館とか大学図書館、さらに国会図書館が役に立つ。本校の図書館を通して、必要な資料を取り寄せてもらうこともできるが、急ぎの場合は直接出かけた方が手取り早い。

広島県立図書館は、広島駅から電車で約25分の、広島市千田町の情報プラザにあって、図書約四十三万冊、雑誌約三百種を備えている。誰でも入館できて、図書検索用コンピュータが自由に使えるほか、窓口では資料相談にも乗ってもらえる。

広島大学の図書館は東広島市にあって少し不便であるが、図書約二百六十万冊、雑誌約一万種を備えている。こちらは、入館に際して本校図書館からの紹介が必要であるが、専門的な問題を深く調べたいときに力を貸してもらえる。

図書館は、来館者にサービスをしたいくて、うずうずしている。気軽にぶらっと出かけたたい。

読 書 感 想 文

歴 史

「長屋王木簡の発見」

(寺崎 保広 著)

M1 濱西 はるみ

「長屋親王宮鮑大費十編」

この一言で千三百年近くも昔の人々の生活が分ってしまうのです。寺崎さんたちの発掘隊は約二年もの間、奈良市にある平城京内の屋敷あとの発掘調査を行いました。あきらめかけていたころ、四万点もの木簡を発見しました。私は今まで木簡など知りませんでした。発掘調査などというものも根気はいるし体力的にも無理をしなければならないし、おまけに、見つかるものは木のかけらや土器など、何が楽しいのだろうかと思惑に思っていました。でも、寺崎さんたちが木簡を見つけたときの喜びは本から伝わってくるものがありました。どうしてそんなに喜べるのだろうと思い読み続けているとその中の一つの木簡に屋敷の主の名前が書いてあったのです。主の名前がわかるということはとてもめずらしいことで例えてみれば、宝くじが当たるということになるのでしょうか。夢中になるのもわかる気がします。「一つでも宝石のように大切な木簡は——。」と寺崎さんはおっしゃっておられるのは、昔は紙というのは大変に貴重な物だったそうで少しのメモなどは木にかいては削り使っていたから当時の日常生活が手に取るようにわかるからだったのです。私はとても感心しました。当時のささいな日常を一つ一つ調べていき、長屋王に鮑が送られたとか日常生活の一部を知ったとき感動を受ける私にも熱中していることがありますがそれに向かって寺崎さんのようにうち込むことができるだろうかと不安になります。寺崎さんの見つけ得た木簡は歴史を語っているとありますが、私は昔の物といってもお寺などの美術が好きなので木簡という古い物にひかれていきました。木簡にかかれている内容の中に、その当時、「蘇」という牛乳を飲んでたという食生活の発達ぶりや冷蔵庫を使っていたとか私が一番驚いたのは夏には冷房もあったとい

うことです。冬の間に池にはった氷をさらに水をかけ、厚くして夏にそれを切り出して冷房に使ったとかいてありました。昔の人々がすべてこんなにぜいたくな生活をしていたわけではなく長屋王が特別だったということです。

発掘というのは、ただ土をほり返す地味な仕事だけど、ごみとして捨てられてしまった木簡が現代によみがえって、千数百年もの昔のことを私たちにおしえてくれます。そんな宝を捜し求める寺崎さんは最後に

———今日も歴史と「対話」するために土を

ほり返している。———

と語っています。私も、もっと「対話」することが大切だと思っています。

「坂 本 龍 馬」

(八尋 舜右 著)

E1 野田 俊彦

「志士」これは、幕末の世に倒幕を夢見た武士達が、自らを呼んだ言葉である。中でも土佐の暴れ馬として名を知らしめたのが「坂本龍馬」である。今回は、脱藩から長州藩とかかわりをもつあたりを中心に、感想を書きたいと思う。

国を開国の方向にもっていき、貿易をして、富国につとめる。これが龍馬の思想の核をなすものである。なぜこの思想は生まれたのか。これは龍馬が、外国の動きに敏感だったからではないだろうか。このことは、「攘夷はできぬ」とこの時思っていたことから、うかがえる。そしてこの思想により、幕府を倒そうと腹にきめるのである。

倒幕を思いついた龍馬に、厚い壁が立ち上がった。脱藩である。しかし龍馬は沢村惣之丞とともに、脱藩に成功するのである。この行動は、龍馬の現実的な考え方によるものと思う。なぜなら、凡人なら土佐で兵をあげようとするが、龍馬は未来に目を向け、倒幕の動きのある薩摩へ行こうとしたからだ。またここで沢村と出合った事こそが、龍馬の運の強さではないだろうか。沢村がいなければ龍馬の成功はなかったであろうと思う。

脱藩した龍馬は下関をまわり、薩摩の入口で追いかえされ、長崎へ出た。ここで龍馬は身震いするような思いにつつまれたはずである。なぜなら、そこ長崎には貿易によって入ってきた品が数多くあったのである。開国、貿易、そして富国。龍馬の思想にぴったりである。これによって、龍馬の闘志はますますかき立てられたのではないだろうか。

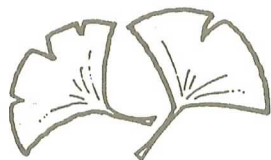
また、ここでも龍馬には感心させられる。頭の良さを武器に、外国商人から金を儲けていたのである。あつかっていたのは主に銃とその火薬。このことが後々役にたつとは龍馬も思いはしなかっただろう。

長州藩から銃の購入をたのまれ、それがきっかけで長州藩の高杉晋作と行動をとることになるのである。しかしここでの龍馬の気持ちは大変複雑であったと思う。土佐と長州の間で気持ちがゆらいでいたはずである。だが龍馬の心はある事件をきっかけに一つになる。土佐で多くの志士が殺されたのである。そして龍馬は、友への思いを胸に、倒幕の思いを新たにしたいにちがいない。

その後長州藩は数多くの戦をものにして、進出していくわけであるが、ここでもまた、龍馬の現実的な物のとらえ方、頭の良さが役立つのである。なんと、この時すでに龍馬は三角測量の技術をもっていたのである。この技術を駆使し、戦略図を作り、幕府を大きく上まわっていたのである。このことから見て、龍馬は大変な努力家だったのであろう。それだけの技術を学びとるには、大変な努力があったのだと思う。また、わずかながら英語も分かったようである。

ここまで書いた部分が、僕が龍馬の人生の中で、一番好きな所である。最後にこの本の中に、とても龍馬らしい内容の姉への手紙の一節を書いておきたい。

土佐の芋掘りともなんともいわれぬいそうろうに生まれて、一人の力で、天下を動かすべきは、是また天よりする事なり。こう申しても、決して決してつけあがりはず、ますます住みこうて、泥の中のすずめ貝のように、常に土を鼻のさきへつけ、砂を頭へかぶり居り申し候。



文学

「高安犬物語」(第32回直木賞受賞作品)

(戸川 幸夫 著)

M2 竹本 友和

まず、この本の主人公は、吉と犬のチンの一人と一匹であるという所が面白い。どちらが主人公ともいえない。普通だと誰か特定の人物一人、あるいは動物一匹が主人公になるのだけれど、そうでない所が他と違って良かった。

吉は、始めは短気者で乱暴でおそろしい性格だったけれど、徐々にそんな性格とはがらりと変わって、温厚で気のやさしい性格になったので驚いた。本当に初めの内筆者が話しかけても無視し、通り過ぎたりしていたけど、結局は仲良くなった。その仲良くなったきっかけというのは、高安犬である。筆者は、高安犬に限らず日本犬に興味があった。そこで、吉がすばらしい高安犬を飼っていると村人から聞いて、その犬を見たいと吉を訪ねた。始めは、相手にしてくれなかったけど、ずっと訪ね続ける内に筆者の真面目な願いがやっと通じて、話を色々してくれるようになった。チンは確かにりっぱな犬だった。十年にわたる熊との闘いで仔熊二頭、手負い熊六頭を噛み殺していた。こういう犬は百匹に一匹いや千匹に一匹らしい。これは十万円で一億円の品物が買えるのと一緒の計算なので、どれだけすごいことかわかる。それだけのことはあって、闘争心もすごかった。実物を見た訳でもないのに、どんな犬でどうやって熊等をしとめたのかということもすっかり頭の中で想像できた。こんな強いチンも、生殖器に癌みたいなのができるポリップという病気にかかった。この病気は手術で何とか治った。しかし、今度は素麺の様な白い長い虫が心臓に巣食ってしまうヒラリアという犬にとって致命的な病気にかかった。そして残念ながら死んでしまった。その死に方が何ともチンらしく、よろめきながら工場の裏手の小高くなった茂みの中に頭を突込んで、伏せの姿勢で死んでいたらしい。これは吉や筆者に無用な姿をみせたくない為にこのような行為をとったのであろう。ここでもふつうの犬とは違った所を見せている。まさし

く千匹に一匹の大物だと思った。そしてチンの堂々とした元気な時の姿を永久に残して置こうと、剥製をつくって東京の科学博物館に寄付しようと決めた。五円の費用の所を後世に残すものだからと十円札を出して注文した。日が過ぎて、とうとう剥製ができた。筆者たちは、わくわくして剥製を引取りに行った。しかし、あの堂々とした美しいチンの風貌は微塵もなかった。筆者たちは力が抜けてゆくのを感じ、怒りがこみあげてきた。だから結局博物館に寄付せず、チンが一生を懸けどこよりも愛していた土地に埋めることになった。これは、チンが死んだ姿を皆にみせるのがイヤで、故郷で安らかに眠りたいという思いから、チン自身が剥製師にヘタに作ってくれと願いながら、こういう結末になったのではないかと僕は思う。

「青春デンドケデケデケ」

(第105回直木賞受賞作品)

(芦原 すなお 著)

E2 山田 隆司

コックのバンドを目指していた。藤原竹良たちのデビューまでを書いたこの本を読んでとても感動しました。メンバーは高校生で、バンドメンバーを集める時の苦勞から練習場所をさがすこと、楽器を買うためにアルバイトをしたことなど、バンドを組む以前のことからふれてありました。

友達の家を使っていたが反対が出て、学校の軽音楽部の部屋を使って、たった週一回の合同練習だけで、あとは個人練習を徹底的にやったというから、よっぽどロックを愛していたということが読み取れます。

そのバンドにもとうとうデビューの時が来ました。店の開店記念パーティでの演奏をまかされたのです。でもそのパーティも客にじゃまされるなどして半分しっばいしてしまった状態でした。

そして、昔以上に練習をつみかさねて、学校の最後の文化祭に出場することが決定して僕自身にも、こんどは絶対に成功してやるという気持ちが強く読みとれました。前日には泊まりこんで、楽器の見張りをしたり、当日の朝もAm5時から練習をするということからも意気込みを感じることができました。これだけやれば、絶対に失敗することはないだろうと読んでいて感しました。本番になり、とうとう最初で最後の本デビ

ューの時がやってきました。予想以上の人が集まってすごい人気だったということは言うまでもないと思います。そして、バンドは終わりました。

この本を読み終えた時に、これだけ苦勞してやったんだから、とても心に残る思い出になり、一生忘れることはないだろうと思いました。仲間との団結もとてもよく表われているからこそ、すばらしいものになったんだと思います。僕には、まだ徹底的に心に残るような苦勞したこと、高専生として一生心に残るような事はまだありません。まだ先が長いけれど、過ぎていくときはあっという間なので、できるかぎり、何についても参加していきたいと思います。

そうすることによって初めての心に残るようなすばらしい体験ができると思うし、これだけは、本当にやったと胸をはって言えるからです。

政 経

「ガン病棟の九十九日」

(児玉 隆也 著)

C3 藤原 理恵

現在医学の範囲である問題が社会問題となってきた。例えばテレビなどで最近よくとりあげられる「脳死」、他の動物からの「臓器移植」など、医学が発達するにつれて倫理のからむ問題が発生した。

私は、休み前に見たあるTV番組がきっかけで、「ガン病棟の九十九日」という本を読んだ。

TV番組では方針のちがう二つのガンをとりあつかう病院をとりあげていた。一つの病院は命を少しでも伸ばすことに徹底し、もう一つの病院は残りの人生をどう生きるか、という倫理にこだわっていた。

私はこの番組をみて医学における倫理のありかたについて興味をもった。そこで「ガン病棟九十九日」を読んだ。重い病気を患った時の状況を少しは理解できるのではないかと——、と思ったのだ。

この本は著者がガン病棟で死と闘う自分自身の姿を描いている。この著者の入院した病院は延命治療に徹底していた。実際にはガンと知らされないが、少しずつ著者は自分がガンであることを確信していく。

著者はその病院に入院する前、行きつけの病院で半年、診察してもらった。あまりにもひどい激痛がはしるにもかかわらず、「神経痛」としてあつかわれる。半年間も誤診が繰り返された。

恐ろしいと思った。病を直すはずの病院が加速度的に死を早めた。

ガン告知をしなかったことにも疑問をもった。だが、この本を読むと著者は自分の病を確信した後も「ちがうかもしれない」と希望をもちつづけた。そこで告知をする、ということは、希望を失うことになる。特にこのような死の色のこい病では絶望してしまうかもしれない。

そこで現れたのが残りの人生をどう生きるかということにこだわった病院だ。

いずれにしても一番重要なのは本人の意思だと思う。今までは入院したらすべて医者の考えに任せたままであったが、これからは患者側が治療方針を選択することも重要なのではないだろうか。

「結婚と家族」

(福島 瑞穂 著)

A3 沖本 千枝

夏休みに入る少し前ぐらいに、民法改正について色々なことが報道され、政経の授業でも取り上げられたことがあった。その中の「夫婦別姓」の項目は私にとってとても新鮮な考え方であり、こんな考え方もあったのかと驚かされた。それ以来ずっと夫婦別姓には興味を持ち続けていた。

そういうわけで、今回『結婚と家族』という本を手にとってみた。この本には夫婦別姓のことだけではなく、戸籍のこと、家族法のこと、事実婚のことなどが書かれてあった。いずれも私達の誰にとっても身近なことばかりで、主に男女平等ということと、まだまだ日本人の意識に根強く残っている「家制度」を廃止しようという観点から書かれていたように思うが、法律のことがよくわからない私には少し難しかった。しかし、夫婦や親子、家族などについて色々考えられた。

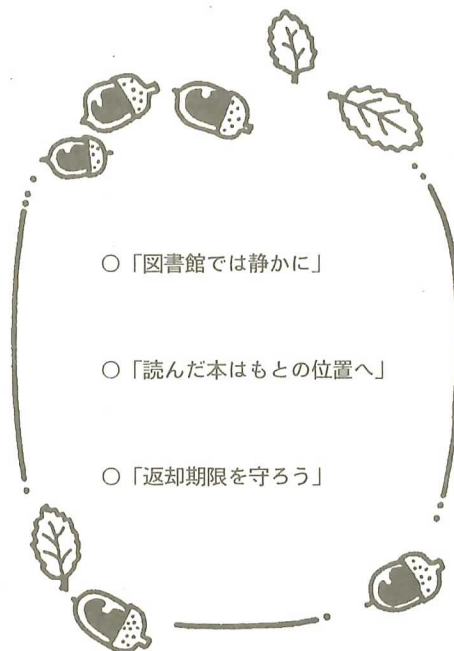
夫婦別姓についていえば、私は賛成である。1990年の調査によると、結婚のときに夫の姓を選ぶ女性は97.7%であるという。私の母の姓も父の姓である「沖本」

だし、私の周りにも妻の姓を選んでいる夫婦などいない。私も実感として沸いたことはないが、将来結婚したら夫の姓を名乗るものだと思っていた。嫁に入るといいう言い方はもともと好きではなかったが、名前については疑問すら持っていなかった。だからこの本で、「氏名権は人格権である」という文章に行きあたったときに、妻が夫の姓を強制されるような今の制度はおかしいと思ったのだ。

かといってやはり同姓がいいという人もいるだろう。だからやはり、同姓か別姓かをえらべるのがベストだ。この選べるというのが大事なのだと思った。自分にとっていい形を選択するのは、個人の権利として尊重されるべきだと思った。

その他にもこの本には、言われてみればそうだというようなことがたくさんあった。皇室典範の項目に、「女性は天皇になれないのだろうか」という文があったけれど、それを読んだとき私はうれしかった。私もそう思っていたからだ。それだけではなくて、なぜ皇位を継承する順は長男が先なんだろうと思う。兄弟に順番をつけるのはおかしいと思う。私は「次女」だけれど、それにも疑問が生じる。私の価値は長女の「次」なのだろうか。

常識と呼ばれていることには、極めて疑わしいものが多いということに気づいた。私はそれらのものにとらわれることなく、私なりに色々なことに疑問を持っていきたいと思った。



随 想 ・ 読書雑感

「自分にとっての読書」

M4 野村 和未

中学生のころにはマンガ以外の本を読むことはほとんどなく、普段から読書をしている人がいるのを不思議に思うくらいだった。あの頃の僕にとって活字ばかりの本は難攻不落の要塞に等しかった。あまりにも大げさな言い方だと思うかもしれないが、当時の僕にとっては決して大げさではなく、自主的に読もうとした活字ばかりの本の中で最後まで読み切ったというのは、中学の3年間で1〜2冊程度ではないかと思う。いつも、ずいぶんと読んだつもりでも実際は全体の10分の1も読んでいないという状態が数日続いて読むのをやめてしまう。

ところが、高専に入学してからは文庫やそれ以外の本をずいぶんと読むようになった。最初は何巻かシリーズになっている文庫を読み始めた。そのシリーズはすっかり気に入ってしまって、すぐに読んでしまった。そんな感じで中学の頃はろくに読もうとしなかった活字ばかりの本を読むようになった。それ以降は文庫以外にもいろいろと読むようになり、今では授業と授業の間の休憩時間に時間を惜しむように本を読むこともある。

今でもいくつかの文庫のシリーズは読み続けているけれど、最近では政治やその他の知識や情報を得られるような本を読むことが多くなった。雑学を含めて、自分は何も知らないんだなと思うような機会がずいぶんあったために、とにかく色々な知識を得ようと思って、そのために本を探すようになった。

文庫以外の本を読むようになったのには別の理由がある。最近読んだ本はたまたま政治の本だったが、政治だけでなく多くの人たちの間で議論されている問題について、人のまねではなく自分自身の考え方を持てるようになりたいと思ったからである。それに必要な知識を得るために本屋へ行くと、いろんな分野の本でおもしろそうな本を探すようになった。

そんな理由で本を探し始めて、最近では政治関係の

本を2冊見つけ、1か月くらいかけて、休憩時間やひまな時間を使って、その本を読み切った。そのおかげで今では政治の関係で少しだけでも自分自身の意見を持つことができるようになったので、これからももっと多くの本を読もうと思っている。

今の僕にとって、本を読むということはただ楽しむだけでなく、自分だけの考え方を身につけるという目的もあるため、とても大きな意味を持っている。また、まだまだ知らなければならないこととかがたくさんあるはずだから、僕にとっての読書の価値はいつまでも変わらないと思う。

他の人たちの多くは、ただ楽しむために本を読んでいるのではないかと思う。もちろん、自分を良くするために本を読んでいる人も少なくない。楽しむために読むことだって十分価値のあることだけれど、同時に自分を良くするための読書もするべきだと思う。できればできるだけ多くの人にそれをやってほしいと僕は思っている。

「蹴球と私」

M5 岡 有希

なぜかこの読書感想文を書くハメになってしまった。とりあえず引き受けてはみたものの、最近、感想文を書けるような読書をしていない事に気が付いた。というわけで、今さらあせって読書をするのも面倒になった。

私は小学生の頃から、読書は、苦手であった。その事はもちろん現在においても、変わらないのである。

それにつけて新聞を読まないせいか、自分が思うに語学力は0に近い。といってこのまま書かないわけにはいかないので、自分の中で興味深いサッカーのことにについて書くことにした。

最近ではJリーグが始まり、サッカーのことを知らない人はいないのではと思う。私は今年8月まで、サッカー部に所属していた。私のサッカーに対する考えは、はっきり言って“オタク”の域に達していると思

う。

2年前ほどから毎週サッカー中継が行われるようになったが、この中継の中では多彩なゴールシーンが見られる。ほとんどの視聴者はこの場面を楽しみにしているものと思う。私としては、そこではなく、その前提をつくったチームプレイに注目してほしいのである。

細かなワンツー、芸術的なスルーパス、もちろん守備の方ではゾーンプレス、ワンツーマンディフェンスというように色々な戦術がある。特にゾーンプレスについては、個々の選手の能力が要求される。ゾーンプレスというのは敵陣内からトライアングルの形をつくり攻撃の起点となることのできる、近代サッカーの形といえる。

しかし、先程おこなわれたワールドカップでは、最後方からのロングパスで中盤を省略したカウンターの形が多かった。そしてこの形がこれからのサッカーの戦術となるそう。私は断固として反対である。

すばらしい守りと中盤があり、選手のアーティスト的想像に満ちあふれたスポーツこそサッカーである。

ここでは本の話はしなかったが、読書というのは、自分の読解力・語学力の伝となるものなので大切だと思う。このまま今の自分が続かないためにも、読書に勉めたい。

まもろう返却日



「勝海舟と坂本龍馬」

E4 渡辺 慎一

今現在、日本は平和で豊かな国となっている。だがわずか130年前には、鎖国をしており、人々は外国のことなどあまり考えていなかったと思う。そんな中、それまでになかった黒船来航という出来事があり、時の権力者である江戸幕府は開国にふみきるが、日本国中には「夷臭斬るべし」と攘夷思想が幅をきかせ、幕府側の開国派、勤皇の志士と呼ばれる人々の尊攘派にわかれ、両者は対立した。そんな中、尊攘派の坂本龍馬が幕臣で開国論者の勝海舟を斬殺しに行くということで二人は出会うこととなった。普通、一般的に考えて殺しにきた相手を自分の弟子にしてしまうなど考えられないことだと思う。それをやってのけた勝海舟という人物は、何者も恐れぬ胆力と、たとえ刺客だろうとも、自分の説得力にはかなわないという強い自信があったのだと思う。この二人の子弟コンビは、わずか五年間であったけれども、他に類を見ない活躍をしている。例えば海軍の建設、雄藩連合会議、反幕勢力の糾合（薩長同盟）、幕府の結着をつけ（大政奉還）新しい国家創造の準備などである。他の人物によって行われたこととなるが、どれもこの二人なくしては成りえなかったと思われる。筆者は、「もし、勝海舟と坂本龍馬がこの時期に出現し、揃うことがなければ「明治維新」は成就せず、かりに達成されたとしてもかなり遅れて、しかも、不徹底かつ混乱を長期化させたに違いない」と述べている。まったくそのとおりだと思う。なかでも薩長同盟を成功させたことは、たいへん大きいと思う。坂本龍馬は他の志士とは違い自分を信じ、まわりに流れることはなく自分の道を歩んできたのでこの薩長同盟という偉業をなしとげたのだと思う。もし仮に僕がこの時代を生きていたら、坂本龍馬と同じ様に自分の道を歩めただろうか、おそらく周りの人々に流されていたに違いない。現在においても、勝海舟のような強い自信と、坂本龍馬のように他人に流れることなく自分でよく考え、自分の道を歩んで行きたい。

「今日に生きる17世紀の哲学」

E5 物部 恵介

『他人はあなたを陰に迫りやることによって評価を得る』この文章はバルタザール・グラシアンという17世紀に生きた1人のイエズス会の高僧が残したものである。

グラシアンは墮落と偽善にまみれた17世紀のスペインで、彼自身みにくい権力争いに巻きこまれながら、人間として立派に生きるという信念を貫いた人である。その信念を、彼は晩年になって書き残している。それが『賢者の教え』であり、『他人は…』という夢も希望もない文章は、この本に示されている彼の信念の1つである。

グラシアンが彼の信念を書き著すためにペンを走らせたのは確かに17世紀である。しかし『賢者の教え』に収められている数々の彼の信念は、20世紀が終わりに近づいている現在においても、決して古くさいものではない。逆に明日にでも生かせそうな、例えば『つねに自然体でいられる人ほど好まれる』『つねに信頼できる友をもて』など、その全てが今日生きた意味を持っている。

始めに示した『他人は…』の文章は悪い意味にとらわれやすいが、グラシアンの説明によるところである。『あなたを陰らせる人間とは決してかかわるな。

(中略) たとえその評価があなたの努力の賜物であり、あなたに帰せられるべきであったとしても、世間の目には表に出た人間によってもたらされたように映る。…』つまり、自らが輝くべき場所では、他人を照らしてやる必要はない。自らの功績は自分の為にあるということを言っているのである。

話の内容は多少難しく、他人に反感を受ける表現もあるが、熟読すると彼の信念は人生を巧みに生きていく方法を明確に示しているということに気付くだろう。

『人の言行を簡単に信じてしまうのは分別がない証拠』であるが、複雑な現代社会において、『生きるために必要なものは満遍なく使うものだ』確かにそうである。

「すてきなあなたに」

(大橋 鎮子 著)

C4 畝本 紀子

数年前にある人から贈られたこの本は、その時の私にとっておもしろいものではありませんでした。けれど、久しぶりに読んでみると私の感想は“つまらないもの”から“おもしろいもの”へと変わっていました。感想文を書くために読むような難しい本ではないのですが、心があったまるというか、とにかく一つ一つの話がかわいらしいのです。

友達から薬のようなものをもらい、病気の時に開けてみて、と言われたら普通はもちろん薬だと思いますよね。ところが中身は電話番号で、かけるとその友達ができるわけです。病気の時に一人でいるのは心細く、気弱になるものですが、そんな時なつかしい声を聞いて楽しく話せばきっと気分が良くなるでしょう。ほんの少しの思いやりが、人の気分を穏やかにしてくれるのです。

また、この本は1月の章、2月の章—という構成なのですが、3月には夢、9月にはぶどう、というようにその季節の果物のちょっとおいしい食べ方も紹介してあります。もちろんそのままでも十分においしく、少しの手間をかけるだけで、いっそうおいしくゼいたくな気分が味わえます。自分で実際に作ってみたいものがいくつもありました。

薬の場合も果物の場合も結局は気分が違うだけなのかもしれませんが、その「気分」が大事だと思います。ほんの少しの出来事で一日中良い気分でいられたり、逆に暗い気分でいたりします。それなら、自分で工夫して毎日楽しく過ごす方がいいです。

毎日の生活に、余裕が持てる、っていい事だと思います。気持ちに余裕があれば、自分の持つ雰囲気も変わってくるでしょう。私がこの本を頂いた人は、ユーモアがあり、明るい人なのですが、どこことなくおしゃれで上品な雰囲気を持った人です。この本を選んだのも、とてもあの人らしいと思います。私は、とりあえず歳だけは大人に近づきましたが、中身は相変わらず、といったところでしょうか。忙しい毎日の中にもゆとりを持つようにして、「すてきなあなたに」が似合う大人になりたいものです。

「マイライフ」を観て

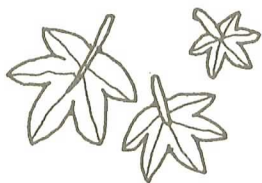
C5 関 泰心

この物語を一言で表すと泣けた。

というわけで、この物語の概要を簡単に説明すると、ごく平凡な若い夫婦がいて、妻のお腹には子供がやどっている。ところが夫はもう医者には見放されているほどの病にむしばまれていて、子供が生まれる頃には、もうこの世に存在しているかどうか分からないというほどの状態だった。そこで、この夫は、自分が生きていた証しに、自分自身や、その周囲の人々や町並みなどをビデオカメラに撮り、自分の子供が大きくなったらこれを見せてやろうというものだった。日に日に、夫の体は病にむしばまれていったが夫はその日その日を一生懸命に生きた。そしてある日、夫は、カメラを自分自身に向けて、生まれてくる子供のために、てれながらメッセージを送っていた。その一言、一言には飾り気はなく、本当に息子に話しかける様な父の言葉に僕は思えた。その空間に漂うものは、どこにでもありそうな家庭の会話の様な、何と表現したらよいのか僕には言葉は見つからない。がとてもあたたかいものだった。

夫は、毎日がんばり生きぬき、奇跡的にも、自分の子供の姿を見ることが出来た。さすがにそれからは彼のがんばりもむなしく長くは生きれなかったが、息子と三人での生活をめいっぱい過ごした。しだいに歩けなくなり、手の自由もうばわれ、寝たきりの状態になっても、それでもなお自分の人生を最後の最後まで生き抜いた。うすれゆく意識の中で、自分が少年の時に抱いた夢を思い出しながら、彼は、妻や息子や家族に見守られながら静かに息を引きとった。彼の人生は、人から見ればごく平凡だったかもしれない。だけど、彼は自身の人生を最後まで、父親として、夫として、そして一人の人間として生き抜いた。

だから泣けた。



「こんな家に住みたいナ」

(延藤 安弘 著)

A4 風早 裕子

この本は、絵本から住まい・町作りの意義を、発見しようとしています。次代を担う子どもたちの心の中に、住まいや町づくりについての想像力の種子をまくのは絵本だとしています。21世紀に、自らの住まいを選択したり、つくことに参加したり、環境改善へのはたらきかけを行う主人公が、今の子どもたちであることは疑いようがありません。21世紀というと、コンピューターや機械などによって装置化された住宅や建築をイメージしてしまいがちですが、むしろ、現状の中にこれからの都市住居の望ましい付き合い方、歴史のなかに蓄えられているヒューマンな文化をどう引き継ぐかなどを、お説教的でなく、自然な楽しみとともに会得していくような絵本が今、求められている。と、述べられています。

私が関心をもった項目を幾つか、紹介していこうと思います。1つめは、“ゆめのまち、いまのまち”であげられているバーバパパのはこぶねです。バーバパパは、世界中の人気者で、かつ、日本でも親しまれている、と思います。この絵本は、公害に満ちた環境を緑に満ち溢れた環境につくりかえるという内容です。すごく分かりやすい展開のなかに、公害と、ロケットが象徴する現代を背景に、人間と生き物の切っても切れない関係を上手く描ききっている絵本だと思います。ロケットのはこぶねで、生き物たちが私たちの環境から脱出してしまわないようにするために、ひとりひとりが、地域社会が、企業が、自治体が、国が、何をしなければならぬかを、語りかけているようです。機械化・装置化がどんどん進展する現代の都市環境の中であって、他方で、住環境を”野性化”することがますます大切になってくる。そのことによって、生き物の一種である人間の生命をその根から切り離すことなく、自ら生命体として発展・成長させることになるのではないか。と、述べてあります。

次は、“建築家は敵か味方か”です。かつて、ルノワールが「この世の生き物でいちばん危険なのは、建築家だよ。やつらは戦争以上に荒廃に手をかすぜ。」と、残したそうです。こうした言葉を裏付けるかのよ

うな絵本“The Architect”は、現代の建築家に問いを投げかけています。文字のないこの絵本は、工場のような住むための機械としての家を建てるまでの様子を詳しく表現しています。建築家・開発者は、沢山のお礼をかかえてほくそ笑んでいるが、そこに入居した人々がつまらない顔を窓からのぞかせています。そこに住む子どもたちが、見事な砂の家を作ったのを見た建築家たちは驚くが、それを靴で踏んづけて、すたすたと行ってしまうのです。こんな風に描かれているのですが、そこには現代の建築家・開発者への痛烈な批判がこめられているように思います。建築家の職能とは、「他者の環境的要求に、形を与えるために必要とされる専門的な技能」のことだそうです。この絵本は、建築家が「他者の環境的要素」に誠実に応えないことへの戒めの書ではないでしょうか。現代の建築家は、建築を単に彫塑的・形体的なものとしてのみ据えるのではなく、住み手の心意気や参加行動をもまきこみ、社会的な広がりの中で創造活動を展開していったこそ住み手のがわに立つ心強い味方といえるでしょう。と、述べてあります。そこで感じたことは、本当にすばらしい建築とは、批評家がどう言うよりも、実際にそこで暮らしていく人が住みやすい環境を、得たかどうかということです。住み手にとっては、外観も大切であるが、それ以上に生活をする場がいかに使い勝手がよいかが大切だと、思います。

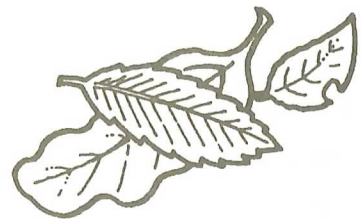
最後は、“イギリスはなぜ高層住宅をやめたか”です。ある社会学者は、4階以上に住んでいる5才以下の子どもについて、その72%が同じ年頃の子どもとめったに遊ぶことがないという調査結果を示しています。また、医学者は、3・4階以上に住んでいる子どもと低層住宅に住んでいる子どもと比較して、前者の方が呼吸器系と神経症の疾病発生率が高いことを、臨床的に実証してみせています。こうした都市住宅への社会批判が高まる中で、“しあわせ通りのカナリヤ”が、登場しました。それは、町の開発により幼い2人の子どもが離れ離れになってしまう話です。高層公営住宅に住み移った男の子はカナリヤを飼い、そのおかげで離れ離れになっていた、女の子と再会できたのです。これは、再開発に伴う高層住宅によって幼い子どもたちのきずながたち切られてしまうことへの作者の鋭い眼差しと、子どもたちへの暖かい態度がここにこめられているように思われます。再開発・高層化、聞

こえは良いが実際良い方向へ向かっているのかは分らないと思います。便利が良くなる面もあれば、情緒あるものを失ってしまうという面もあるのだから……

この本には、沢山の絵本が紹介されていました。どの絵本も、自然や地域との関連に重点をおいてあるように思いました。子どもたちが身近な環境に歓心を持ち、すぐれた環境・自然を愛しむ、さらに大人になってからも、住宅・町づくりに積極的に参加するという姿勢を作ることに、絵本のもうひとつの役割があると思われます。住み手の住宅・町づくりへの参加が高まることは、住み手とつくり手の距離を縮めるということでもあると、思います。

絵本の意義は、住み手の心をとらえてはなさない、住宅風景をつくるきっかけを与えることだと述べられています。「経済性」と「合理性」のために、人々が慣れ親しんだ地域独自の住まいの表情がそぎ落とされ均一化された住宅風景をつくることに陥りがちであったり、あるいは、伝統的な一戸建て住宅のもつ内部空間と外部空間の接点の多面性を、新しい集合住宅計画では見落としがちであったことなどへの問い直しが始まっているということです。

全体を通して感じたことは、優れた絵本は大人たちをも十分に引きつけ、忘れかけていた子どものころの純粋な感情を蘇らせてくれるのでは、ということです。海外の絵本は、自分の住む町への関心や住み方のマナーを、自然に育むようなものが多いと、思います。子どもの頃に経験したり、考えたりしたことは、大人になって影響するので、我が国でも、このような素晴らしい絵本を子どもたちに与え、親しむことが必要だと、思いました。



新任教職員随想

「呉高専に着任して思うこと」

機械工学科 鬼塚 千明

私は工学部（機械工学科）を卒業し、一時、就職していましたが、学問の道を志ざしたのが遅く、しかも理論的な研究で学位を取得したいと思つていましたので、工学博士号を取得するのが遅く、取得したのが40歳でした。現在も同じですが、その当時も博士号を取得しても、就職の先がなく、しかたなく、永い間、工業高校、工業高等専門学校、大学の教養部等で、永い間非常勤講師をしておりました。工業高等専門学校と大学の教養部で教鞭を取りましたが、高専では4年生、大学では1年生をあいてにしました。高専では応用物理、大学では物理学概説でした。学生の年齢は高専も大学も同じです。その間に気がついたことですけど、高専の一貫教育のすばらしさでした。皆様も御存じの様に、大学に進学するのには、普通高校を3年間履習しなければなりません。高校の生活は大学に合格するためだけの受験勉強です。したがって学問本来の楽しみとか。基礎的な事を時間かけて勉強する暇はありません。ただ落ちこぼれにならないために勉強するだけです。高専のカリキュラムにはすばらしいものがあります。中学校を出て、高専に進み短大卒以上の学力とセンスを5年間の一貫教育で学習できるわけですから、そこには、こまぎれがなく長期的に勉強できます。たしかに数学の面だけ取り上げてみても、高専の方では3年生の時まで偏微分、重積分等学習していますので、高専の応用物理ではそれを取り入れて物理の授業を進めることができます。それに反して、大学の方では普通高校から進学した学生が大部分で、高校では偏微分、重積分などは教えてもらっていませんので、大学の夏休みが過ぎてから、教授されているみたいですので、物理の授業に取り入れることは出来ません。高専の4年生と大学の1年生は同じ年齢なのにこの違いはどこから来るのでしょうか。これはひと



えに高校での受験教育システムにあるのではないのでしょうか。文部省に苦情を言うわけではありませんが。ただ、私が非常勤をしていた高専では大学編入の波がおしよせていました。ドイツ語、数学等では補習授業が行われていました。これでは普通高校と同じく大学の予備校と言うことになります。このまま、この傾向が進みますと、一貫教育のもつ、すばらしさがなくなるのではないかと思います。皆様いかが思いますか？

「随 想」

土木工学科 市坪 誠

— こんこんと湧き出る泉があって、
そこへ水を汲みにいくのに、
何も持たずにいく人がいますか—

作家の山本茂美氏が、ある雑誌記者からの「どうしたら、取材が上手くなれるのでしょうか」との問いに答えた言葉です。



水を汲みに行くという目的で泉まで行ったのに、何も持たないでいく人がいますか？あなたなら湯呑み茶碗を持っていますか、桶を担いでいきますか？

私たちのほとんどは、おながかへったときでしか食べ物有難みはわかりません。つまり、求める物を無くしたときでしか、それらに対し鋭敏に渴望しえない。

取材にいくのに、何も持たずにいく人がいますか？（ここではけっして紙や鉛筆といったものを指していません……老婆心ながら）つまり、相手の気持ちを理解しようとしなくて取材にいくひとがいますか？相手の喜びや悲しみにある心根を理解できずに、どうして取材できますか？

ひとはそれぞれ、自らの内にある容積分しか、相手を汲み取れません。取材というものは相手の気持ちを

理解しようとする取材者側にそのほとんどがかかっているのです。取材する側の心の容積の広さなくして、心を磨くことなくして相手を取材することなどできません。……と答えたといいます。

いろいろな情報が氾濫する現在、自分にとって必要か不必要か、情報の取捨選択が大変なことも事実です。また、どれが自分にとって価値ある情報か、それは自分でしか判断しえない。だからこそ、情報が受け取れる態勢は常に維持し、そうして自らを磨いていたい。相手の立場になって物事を考えられるようになりたいと思います。

私はこの春、高知高専より本学へ転任してきました。諸先生方の研究に対する熱意や努力には、心より敬服しております。在職5年という節目に、本学の一員に加えていただき非常に嬉しく思っています。

まだ呉高専全体の学生気質をつかむまでにはいたっていませんが、私の研究室に配属された学生達は、非常にバイタリティーがあり感嘆している次第です。

私が今、学生に伝えられるのは熱意のみで、教育、

研究など、学生の中に積極的に飛び込んでいきたいと思います。そうして、学生に負けないよう、また学生と共にすべてにポジティブな姿勢でいきたいと思います。学生諸君、もしよろしかったら、一緒におもしろい(魅力ある)ことをしましょう。

最後に、近頃私が読み薦める本を紹介したいと思います。

それは、上前淳一郎著『読むクスリ』(文春文庫)です。くすりはクスリでもお医者さんからもらう薬の話とは違います。ビジネスでのエピソード、新商品開発の苦勞、発想のヒントなど、社会の第一線で活躍する方々の小話を集めています。話はそれぞれ短編で独立してますので(長くて3~4ページ)、興味あるところから読め、飽きがこず1冊がアッという間に読めます。1冊400円ちょっと、現在15巻(単行本21巻)まで出ています。

ここはひとつ、ちょっとしたウンチクから蓄え、同じ事柄でも多方向から見る術を養ってみてください。

海外だより

「カルチャーショック」

電気工学科 野村 利英

私は、平成5年6月から同年12月までの6ヶ月間、文部省在外研究員として、アメリカ合衆国 New York 州北部の Potsdam という町に在る Clarkson 大学で研修させて頂きました。在米中は、私が考えてもいなかった数々の出来事がありました。今回は、その幾つかを紹介しましょう。

a) 日曜日の午前中のアルコール

今日は午後から、アメリカに着いてからずっとお世話になっている、Ms. Mallam(Clarkson 大学の隣にある New York 州立大学 Potsdam College の講師)とお嬢さんの Norah(高校生)が、私たちのアパートに日本食



お世話になった Mallam さんの家で

を食べに来るというので、午前中私達(私と妻と大学生の息子)3人で近くのスーパーに買物に行った。

買物を済ませて私は一人で先にレジを出ていて、妻と息子が支払いをしていた時のことである。突然、息子が大きな声で私を呼ぶので、びっくりしてレジの所まで行ってみると、レジを打っていた中年の女性が凄い剣幕で興奮して怒っている、何が何だか判らないので、「お願いだから、大事な事だけ、ゆっくりと話し

てくれ」と頼むが、彼女は同じ調子で怒っている。困ってどうして良いか判らない時に、後ろに並んでいた人が説明してくれた。「“New York州の法律で、日曜日の午前中は、アルコール類は、売っても買っても飲んでもいけない”と彼女は怒っています」。なるほど見れば、ビールだけレジを打っていない。急いでビールを棚に返しに行く。

これが日本だったら「アルコール類が置いてある棚に、鍵でもしてくれ」と頼みたい。

b) 日本人の丁寧さ

ある日、指導教官の Dr. Hammam が、自分で作った野菜を学校に持って来てくれた。もちろんその時も御礼を言い、翌日も「先生、昨日はありがとうございました。とっても美味しかったですよ」と言うと、先生は、変な顔をして「君は昨日礼を言ったのに、何故今日も言うのか?」と、不思議がる。

アメリカで出来た中国人の友人の Dr. Xu がこれに付いて、解説してくれた。「全てに付いて、日本人は丁寧過ぎる。アメリカ人は御礼を二度言う事は無い。中国人は丁度日本人とアメリカ人の中間位だ。自分は神戸に7年間居たが、日本人が丁寧過ぎるのでびっくりした」と言うのである。

私はこの事に関しては、アメリカ人の方が淡泊に思えて仕方が無い。

c) アメリカ人はその場限り?

大学院2年生の Dan 君は Dr. Hamman に凄くよく叱られる。そこで Dan に食事に来るように誘う。Dr. Xu にも声を掛ける。Dr. Xu は、私に「Dr. Hammam は呼ばないのか?」と聞くので「先生と Dan は余り仲が良く無いと思うので、先生を呼ぶのは別の機会にしたい」と言う。「アメリカ人は後が無いから一緒に呼べばどうか」とアドバイスしてくれる。

そこで注意深く先生と Dan を見ていると、先生に叱られる時は神妙な顔をして立って聞いているが、一時間もすれば先生の机の上にお尻を乗せて、先生や秘書の Miss. Theretha と雑談をしている。もちろん先生は椅子に腰掛けて話している。私達が良く洋画を見た時に会おうシーンである。多い時は日に2~3回こんな繰り返しがある。

日本の上下関係の社会から見れば想像も出来ない光景である。私が、彼等を一緒に食事に招待したのは言うまでも無い。

d) アメリカ人のいい加減さ-1-

TVのチャンネルの内、3ヶが常に月日、曜日、時間を表示している。時間は丁寧に秒まで出してる。ある日、急にチャンネルを変えてみると、何と3つ共時間が違うのだ。最も進んでいるものと遅れているものでは、2分40秒も違っていた。自分の目を疑い、何回もチャンネルを変えてみるがやはり違っている。

これが日本だったら、抗議の電話でTV局は大変だろうと思う。帰国後大学の先生にこの事を話すと、「僕が行っていた時は、日にちも違っていたよ」と、言うのを聞いて、もっとびっくり。

アメリカでは、2~3分の違いなんて正確な方なのかも知れない。

e) アメリカ人のいい加減さ-2-

小さな町の中心部に2つの銀行が競い合うように並んでいる。2つ共、外に長いポールを立てて、その上に時計を付け、その下に温度計を付けている。私の時計と比べると、一つは約15分違っている。もう一つは夏時間が終わったのに未だ直していない。

ある日、私の運転する車の助手席に乗っていた Dan に10度以上(セ氏で7度位)違っている銀行の温度計について意見を聞いた。Dan は、けげんそうな顔をして何も言わず私を見ている。運転しながらどの様な答が帰ってくるかしばし待つ。暫くして彼が言った言葉「それでおまえは何か問題があるのか」。私も答に困り、「いや、何も問題無い」。

きっと彼もコメントを求められ、答えに困ったに違いない。考えてみれば温度が10度違っていても実際には、何も問題無いのだ。しかし、そんなアメリカ(人)をみて、いい加減だと思えるのは、私だけだろうか。

f) アメリカ人のいい加減さ-3-

私の息子は良く日本の友達にリポート用紙で手紙を書いた。その度に彼が困るのがリポート用紙を折り畳んだ時に封筒に入らないのだ。実は、リポート用紙の角が直角ではないからだ。それも一寸ずれているのでは無くひどいのだ。

Dr. Xu に言わせると「それはアメリカ人の合理的な所だ。本来、リポート用紙は書くための物であり、角が直角であろうと無かろうと関係無い」。

もしも、日本で我々がそんなリポート用紙を買った時はどうするだろうか。

g) アメリカ人は社交家？

金曜日の夜、Potsdamから30分位車で走った町にある大きなMallに、家族で買物に行った。このMallはCanadaの国境に近く、沢山の人が買物に来る。その日は特に人が多く、丁度日本の祭りの時の情景と同じ様で、まるで肩と肩がぶつかりそうに成る位だった。

歩いていると突然大きな声で、挨拶をして握手を求めてきた女性がいた。彼女は銀行に勤務していて、銀行口座の開設、小切手帳の使い方、カードの使い方、などを親切に教えてくれた人だった。彼女は私の手を握ったまま、今日の買物の事、家族で来た事などを騒がしい人達の中で私に話し、自分の夫と小学生の息子を私に紹介した。それまでに、私と息子は2回、妻は1回だけしか逢った事がなく、こちらは戸惑ってタジタジなのに、そんな事はお構いなしに喋り続ける。最後に「困った事があれば、何時でも又銀行に来て下さい」と言って人達の中に消えて行った。

もし私の立場が逆だったら、多分無視するか、せいぜい軽く会釈するだけで、家族を紹介したりする事は無いだろう。読者の皆さんだったらどうしますか？

在米期間6ヶ月では、アメリカ(人)の事は未だ全く知らないと言っていいだろう。しかし、沢山の友達が出来、沢山の人の人に親切にして貰い、本当に夢の様な6ヶ月を送らせて貰った。その間、ほんのちょっぴりだけどアメリカ人の物の考え方が判った様な気がする。

これから先私も、国籍に関係なくどんどん積極的に人々に声を掛け、出来るだけ親切にしてあげたいと考えている。



Clarkson 大学で

私の推薦する本

「映画を読んでみませんか」

一般科目 周 藤 剛 士

暑い暑い夏だった。記録的な猛暑と言われた。その通りでとにかく涼しくなるもの、涼しいこと、涼しい場所が求められた。デパート、専門館、図書館などは、とりたててそこに用事の無い人も沢山出入りした。だが映画館はどうだっただろう。ここは快適に涼しく、ゆったり座れる椅子があり一日中いても大丈夫だ。そして椅子に座って前方に目をやればそこにはテレビを100倍ひき伸ばした超大画面があり、比較にならない迫力で映像が動いている。音もすごく我家のステレオなど吹き飛んでしまうほどの超多重音響の世界だ。足元が揺れ爆走する列車は見る者を引き裂いて後方へ走り抜けて行く。これほどの世界なのだがなぜ皆ここへ来なかったのだろうか。それではこの世界の

魅力を教えてくれる本を紹介しよう。「活動小屋のある風景」(安岡章太郎、岩波)を読むとまちがいにその映画を見たくなくなってしまう。＜自由を我等に＞＜大いなる幻影＞＜地の果てを行く＞＜望郷＞などヨーロッパの名作が淡々とした語り口で語られる。がその行間から著者の生の声、感動が伝わってくるから不思議だ。「今ひとたびの戦後日本映画」(川本三郎、岩波)は＜青い山脈＞＜また逢う日まで＞＜浮雲＞など戦後の日本の力作を情感豊かに解説してくれる。もう一度見たいと思わせる本だ。「山田洋次の映画」(嶋田豊、シネフロント社)は納得させられる。＜息子＞＜学校＞＜黄色いハンカチ＞などの大ヒット作をおよそ哲学者らしくない語り口で作品の本当のよさをまるで果実の専門家が一番おいしい食べ方を教えるように分析してくれる。てっとり早く、安く、楽しく映画を読もうとしたら「日本映画ベスト150」「洋画ベスト150」(文芸春秋)が最適だと思う。今秋映画を読んでみよう。

「コンクリートの話 I・II」

(藤原 忠〔他〕著) 技報堂出版

土木工学科 阿 部 康 俱

6大工業材料とは、木材、鉄鋼、セメント、プラスチック、銅およびその合金、アルミニウムおよびその合金です。このうちのセメントは、「コンクリート」として私たちの生活の周辺でごく一般的にふんだんに使われています。しかし、このコンクリートは、身近にありながら、普段意識することのない、なじみの薄い存在といわれています。コンクリートが固まるのは、乾くからだとか、コンクリートはすべて半永久的に使用できるもの、あるいは逆に、マスコミの報道などから、10年たらずでだめになるものなどと思っている人も少なくないようです。

本書は、編者を含め15人の第一線のコンクリート技術者が執筆を分担して当たり、身の回りの具体的な例をあげ、図やイラストを多く使って、わかりやすい言葉で述べ、だれでも気軽に読めるように工夫してあります。1巻は、セメントの歴史、コンクリートの固まるメカニズム、コンクリートの構成材料、性質・特性、補修・補強などコンクリート工学の基本的な事柄について順序だてて述べられています。2巻は、コンクリートにまつわるはなし、工学にこだわらないエピソード、コンクリートの将来のあるべき姿などを語っています。1巻では、「なぜ固まるのか」、「コンクリートも出前の時代」「塩分は要注意」など32の話題、2巻では、「竹筋コンクリート」(戦時中に作られ、今なお現役で役目を果たしている鉄筋の代わりに竹材で補強したもの)、「月でつくるコンクリート」など、33編の話題を、興味を持ちやすい項目名で、一つ的话题を10分程度で気軽に読めるようになっており、また、一巻から読まないとい内容が理解できないということもなく、興味のあるところだけを拾い読みすることもできます。

すぐれた建設材料であるコンクリートは、これから、いろいろな方面に、しかも大量に使われるものと思われます。コンクリートを知らない人、これから学ぼうとする人に肩のこらない入門書として、コンクリートの基礎を知っている人は、少し知識を深めるための書としてお勧めします。

「世界デザイン史」

(阿部 公正監修) 美術出版社

建築学科 篠 部 裕

私は常々、工学を教える学校では、「技術史」に関する一般教養の授業をカリキュラムの一つに設け、学生にこれまでの工学・技術の系譜を体系的に教えるべきだと思っている。工学を学ぶ者としては、各々の専門分野に限らず、工学や技術革新の展開を概略程度でも良いから知識として知っておけば、色々と役に立つと思う。ボーダレス、異業種間交流が盛んな時代にあっては、なおさらこの様な授業は必要ではなかろうか。

残念ながら本校にはこの様な授業はなく、建築学科の場合は建築史という授業で、建築に限定してその系譜を学んでいるに過ぎない。

さて、ここでその「技術史」について、簡単にまとめた何か適当な本を紹介できればよいのだが、これについては残念ながら適当な本を知っていない。そこで、今回は「デザイン」についてその系譜をまとめた本を紹介したい(どなたか技術史について適当な御存じの方は、この特集で御紹介下さい)。

デザインと言ってもその内容は多岐に渡る。インダストリアル・デザイン、グラフィック・デザイン、建築デザインなどその内容は広範囲に及ぶ。建築デザインに携わる者は、程度の差はあれ、様々なデザイン領域に関わりをもちながら仕事を進めているため、他のデザイン分野の動向を知っておく必要がある。しかし、デザインの動向、中でもこれまでの系譜をコンパクトにまとめた文献は非常に少なく、これまで気軽に読める本は残念ながら出版されていなかった(少なくとも私個人にとっては)。

この春、美術手帳の3月号増刊として『世界デザイン史』(2,300円)という本が出版された。近代以降のデザインの系譜をまとめたものであり、ポスターなどのグラフィックデザイン、椅子や照明器具などの家具のデザイン、カメラや電化製品などのインダストリアルデザインなどの系譜を、カラー写真をふんだんに使ってまとめた本である。低学年の学生にとっては文章そのものは難しい本かもしれないが、写真をみるだけでも楽しい。高学年の学生にとっては、デザイン史

けでも楽しい。高学年の学生にとっては、デザイン史を学ぶ上で適当な本だと思う（私の研究室でも早速、今年のゼミに使用している）。

本校では残念ながら「デザイン史」に関する授業は

ないが、この本を通して近代・現代デザインの系譜を学べば、今後のデザインや生活に対して、新たな視点が湧いてくるのではなかろうか。

新 着 図 書 10 選

「トーマス・マン」

辻 邦生著 （岩波書店）

激変する時代を生きた文豪マンの生と精神のドラマを鋭く分析する。 （周藤記）

「アメリカ黒人の叫び」

ケネス・クラーク著 （明石書房）

生々しいスラムの実態に迫る貴重なドキュメント。 （周藤記）

「ベルギー ヨーロッパの見える国」

小川 秀樹著 （新潮社）

対立しつつも均衡を保つベルギーの生き方を示す。 （周藤記）

「時間・空間・重力―相対論的世界への旅―」

Archibald Wheeler著 戎崎 俊一訳（化学同人）

重力は最も身近な力ですが、この力の働きが理解されるようになったのは今世紀の初めになってからでした。それを可能にしたのは、アインシュタインの一般相対性理論です。この理論の有効性は、宇宙膨張の予言により如実に示されました。本書の目的は一般相対性理論の概念と論理の構造を難しい数字を使わずに説明することです。豊富なたとえを使って説明しているので、十分な熱意と知的好奇心さえあればきっと理解できると思います。 （深澤記）

「X線応力測定法」

日本材料学会編 （養賢堂）

材料を機械加工したり、熱処理等を施すと材料内部に残留応力を生ずる。この残留応力はその後の破壊や変形に大きく影響をする。したがって、残留応力を測定することは変形や破壊の力学モデルを検討するうえで極めて重要となる。ここでは、X線回折を利用して

応力を測定する新技術を最近までの研究を取入れた専門書である。 （灘野記）

「移動現象論」

平岡 正勝・田中 幹也著 （朝倉書店）

自然界においては、絶えず運動量、物質、エネルギーの移動が行われている。また、機械工業、化学工業、鉄鋼業、その他の各種産業において使用される装置、配管内において、運動量、物質、エネルギーの移動および変換が行われている。このような移動現象を統一的に編成して、説明してあるのが本書である。 （京免記）

「実習Cではじめるプログラミング」

中川路 のぞみ著 （近代科学社）

言語をマスターする上で重要なことは、プログラムのコンピュータにおける動きと問題に対する処理の流れを理解することである。本書は、プログラムが初めての人を対象に、この2つの問題点を解決しながらコンピュータの基礎とC言語の文法を基礎からわかりやすく解説している。また、豊富なプログラムを解くことで、簡単なプログラムを書けるような構成になっている。なお、プログラムは、MS-Cを使用している。 （野原記）

「機械設計の基礎知識」

米山 猛著 （日刊工業新聞社）

機械を作る場合、あらかじめどのようなものを作るかを決める設計をしておく必要があります。

設計とは頭の中に浮かんだ着想を具体化し、図面にまとめることです。

本書は機械設計の基本的プロセスと設計を進めるための基礎知識を初心者に解説した入門書です。

（河口記）

「建築プロフェッショナル入門」

日本建築学会 (丸善)

この本を読んだからと言ってすぐに建築のプロになれる訳ではない。しかし、何やら自分が建築のプロフェッショナルになれるような気がする本である。本書は、若い学生諸君に対して、現場で活躍する多くの人々の体験を通して建築の魅力を教えてくれる本である。

(篠部記)

「看板建築」

藤森 照信著 (三省堂)

「看板建築」という言葉は何を意味するか?。何となく建築そのものが看板化している建築なのであるう、という予想くらいはつく。楽しい建築、おもしろい建築が満載された本なので、まずは自分の目でその内容を確認してもらいたい。

(篠部記)

お知らせ

◎LD利用ベストテンと学年別利用者数

平成6年4月12日からサービスを始めましたLD・CDは4～7月で延べ289グループ624人の利用がありました。

予想をはるかに超えた利用に図書館では驚いています。その殆どがLDの利用でした。4カ月間の利用ベストテンをお知らせいたします。

LD利用ベストテン

タイトル	グループ	人
1位 羊たちの沈黙	33	74
2位 ホーム・アローン	24	57
3位 レインマン	21	44
4位 プリティ・ウーマン	18	44
5位 卒業	14	34
6位 プラトーン	14	29
7位 E・T	9	24
8位 北の国から'83冬	9	23
9位 理由なき反抗	8	21
10位 クレイマー、クレイマー	8	18

利用者を学年別に見てみますと、1年生の利用が一番多く3年生、4年生の順です。2年生、5年生の皆さんはお忙しいのでしょうか。少ないですね。

学年別利用者数

学 年	利用者数
1 学年	177
2 学年	67
3 学年	171
4 学年	133
5 学年	76

図書館では、LD・CDをこれからも充実させていきたいと、考えております。よりいっそうの利用をお待ちしております。

編集後記

今年の夏は昨年の夏と全くかわって、雨(水)の無い夏であった。連日の猛暑で、各図書館は冷たい空気を求めて来館した多くの人々で賑わったに違いない?

本校の図書館の7月、8月の利用者数を見ると、昨年は7,908人(7月:5,267人、8月:2,641人)、今年は11,625人(同:7,758人、同:3,867人)で、昨年と比べて利用者が3,717人(47%)も増加した。冷夏よりも炎夏が図書館利用を促進するということか?

何はともあれ、利用者数が増加したことは良いこと

だ。雨の多い冷夏、雨の全く降らない酷暑、極端な異常気象も、読書の一つの動機づけにしたものだ!

今年の夏の読書の成果をまとめた図書だよりが発行されました。発行に協力して頂いた皆さん、どうもありがとうございました。

なお、図書だよりに対するご意見・ご感想がありましたら、是非、図書係までお寄せ下さい。

(図書館長補 篠部 裕)